

ひまわり 愛の花

赤木由子・作 / 小林与志・え



創作子どもの本 1

ひまわり
愛の花

赤木由子

ひまわり 愛の花

創作子どもの本 1

1974年 2月／発行◎

著者／赤木由子

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島 1 丁目 4-3
電話／東京03-861-1506(代表)
振替／東京64678

印刷・製本／株式会社 ケイエムエス

乱丁落丁本はおとりかえ致しますので、お求めの書店または本社へお申し出願います。

913 赤木由子

ひまわり 愛の花

金の星社 1974

153p 22cm (創作子どもの本 1)

基本カード記載例

もくじ

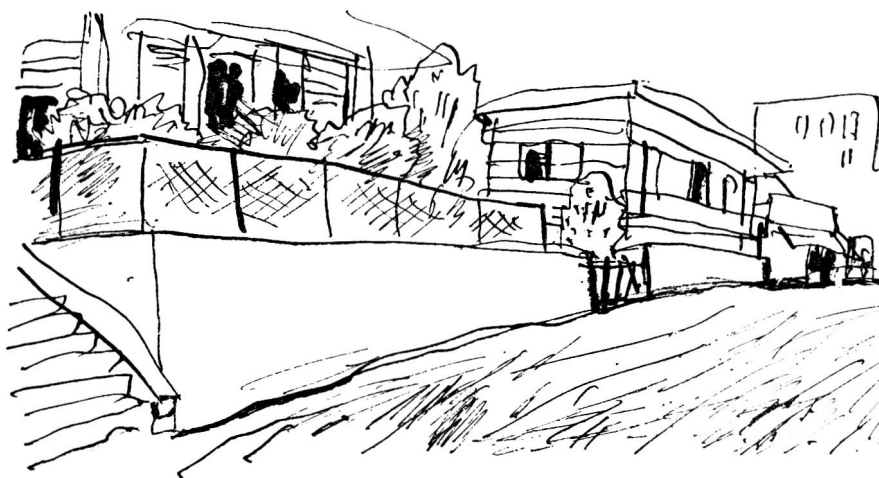
あそぼうけ……………6

ふし目の女の子……………25

ひらけゴマ……………50



あ と が き	ひ ま わ り 愛 ^{あい} の 花	け っ こ ん 行 ^{こう} 進 ^{しん} 曲 ^{きょく}	か な し い マ ル チ ー ズ
150	121	95	71



赤木由子（あかぎ よしこ）

1927年生まれ。児童文化の会、日本児童文学者協会、日本子どもの本研究会々員。おもな著書に「柳とわたとぶ国」（児童福祉文化奨励賞）「はだかの天使」「赤毛のブン屋の仲間たち」「夏草と銃声」などがある。

現住所－東京都三鷹市下連雀6-10-521

小林与志（こばやし よし）

1925年、東京に生まれる。洋画を学んだが、1961年頃から、おもに児童図書の装幀、挿画を手がける。作品に「宇宙バス」「ひろしまのオデット」「地の底へ行くんだ」「流れ星はきえない」などがある。

現住所－東京都葛飾区東金町1-36
公団住宅1-1225

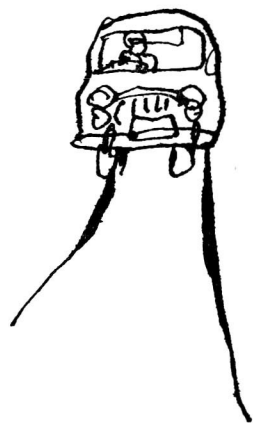
創作子どもの本 1

ひまわり 愛の花

赤木由子



あそぼうけ



アヤは四年生。あだなは、《ひまわりさん》と、《メスのあそぼうけ》。

うちの庭に、三十本くらい、ひまわりがうわっている。

アヤはこのごろ、朝おきるとすぐ、母の三面きょうのまえにすわって、つくづく、じぶんのかおをしらべる。

いまにも、パチンとはじけそうな、まんまるのかお。いろが白くて、かみの毛は赤い。ほおが、ぷっくら、ですぎて、はながめりこ

んでしまってる。

金いろがまじってるまえがみを、くしでなんべんすいても、くるくるとまいて、あっちをむいてしまう。

——こんなかお、いやんなっちゃう。スミをぬったみたいに、くろいかおが、はやってるのになあ。

いままで、^き気にもとめていなかったかおが、いろいろと気にかかる。

——ケン。なまえもカッコいいわ。ちょっぴりさみしそうで、やさしい目。

アヤは、ひとめですきになった。タカシや、クラスの子にはもちろん、父にも母にも、だいすきな、えみ子先生にもないしよだ。

牧野^{まきの}研^{けん}。

しんがっきのクラスがえのとき、アヤたちといっしょに

なった。ケンの父は、航空科学研究所こうくうかがくけんきゅうじょの学者がくしやだ。

——お母さんが、もう一年か、もう一年か、にゅういんしてるなんて、かわいそうなオトコの子。

ためいきがでる。すきになったのといっしょに、やきもちの気もちもした。

クラスがえのとき、ケンだけくればいいのに。ケんと、まえからなかよしだったらいい、マキ子もはいつてきた。

ふたりは、せきがとなりどおしで、家も、おなじマンションの五かいと三がいだ。

マキ子のあだ名は、《ショウギの「ママ」》。やせて、いんきくさい子だ。それなのに、ケンは、マキ子にしんせつすぎる。

きのうもマキ子は、コンコン、ケホンと、せきがとまらなくなっ

た。ケン、マキ子のせなかをさすってやりながら、「べんきょうの、やりすぎじゃないの」と、いった。

マキ子は、ばつぐんにできる。どんなテストでも、八十点^{てん}いじょうとる。あの、かおいろのわるいのは、べんきょうのしすぎにちがいない。

——わたしも、かおいろ、わるくなりたーい。

アヤの、ちやいろのまるい目が、くりくりと、うごいて、母がみていないのをたしかめる。いそいで、コールドクリームをぬり、そのうえから、こげ茶^{ちや}いろのおしろいをすりこんだ。

アヤとそっくりに、いろが白くて、ふとっている母が、だいどころでよんでいる。

「はやくしないと、学校、おくれるわよ。」

アヤは大いそぎで、パンと牛乳ぎゅうにゅうをつめこんで、げんかんからとびだしていく。

ちょうど、むかえにきたタカシと、門のまえで、ばったりあった。タカシが、アヤをみるなり、「ぷふっ」と、口を手でおさえた。

「なにがおかしいのよ。」

「おまえ、かお、あらったんか。」

「あらいましたよっ。」

「なんだか、どすぐろいよ。」

「つかれたのよ。」

「へえ。アヤちゃんでも、つかれることあんの。」

「ばかにしないでよ。ゆうべ、ちょっと、べんきようしすぎたらしいの。」



アヤは、まゆをしかめてみせる。すると、ほんとに、ぐったり、つかれたような気もちになった。

——しめしめ。うまくいきそうだわ。

「どのくらい、べんきょうしたのさ。」

「三十分^{がふ}。」

「すげえじゃんか。三十分もやったの。」

「それにね、本も、つついよみすぎたの。」

「なに、よんだの。」

「ピーター・パン。」

「なんだ、それ。りょうりの本か。」

「なんで、りょうりの本なのよ。」

「なんとかパンで、パンのつくrikあたとちがうんか。」

「やんなっちゃうなあ——。」

ふたりのよこを、こがたトラックが、材木ざいもくをつんどおりかかった。うんてんせきから、タカシの父がかおをだす。アヤがかけよる。

「おじさーん。のつけてえ。」

アヤは、ゆううつそうなかおを、つづけるはずだったのに、すぐ、はでなこえをあげる。

ふたりは、じょしゆせきにのりこむ。

車くるまをはしらせながら、タカシの父がいう。

「アヤちゃんは、うちのタカシの、およめさんになるんだもんね。」

「うん。」

いつものようにへんじをして、「しまった」と、おもった。

アヤのかぞくと、タカシのかぞくは、なががいい。アヤの家はタ

カシの父がたてたのだ。おとなたちはあつまるとすぐ、「タカシとアヤは、けっこうするんだもんね」という。アヤはよろこんで、「そうよ。タカシちゃんの、およめさんになったげる」と、いった。――わたしも、むかしは、むじゃきだったわ。

アヤは、すっぱいかおをする。ケンがきてから、気持ちがかわたのを、タカシの父はしらない。――タカシの父を、いますぐ、がっかりさせるのはかわいそうだ。

「でもねえ、おじさん。タカシちゃん、大学にいかないんでしょ。う。」

「おやおや。大学をでないと、いやなのかい。そうだよな。アヤちゃんの父さんは、日の丸銀行ぎんこうの課長かちょうさんだもんな。よっしゃ、ふんぱつして、タカシを東大とうだいにいれてやらあ。」

